



本朝墨蹟
下





本朝名公墨寶卷之下

目錄

八幡山惺々翁

雄德山松花堂惺翁

花下忘歸因
美京樽前勳
醉是喜風

さるふハ粒はれふ

さるふハ花

種かちさるふ

のけさるふ

あさるふ

位細沙鴉

湖落曉

飛強鳴る

さるふ

三ノ一ノ七ノ九

月夜之松雪吟

花之

花之

如史韻光

知新之

今宵深宿

在祐良

氣名子不

古者如然也

如使如若

此若

如如

如如如如

朝踏落都相

伴出暮看隨死

鳥一時來

ゆく羅ちふ本此

たふせし

こころて

なにかしらぬ

静まりかゝる

衣帯

背
背
背
物
信
子

紗
紗
紗
富
物

香
軍
箱

きりぎりす

ふりそ

花の文

子あは

り

費

うき

被北

あふ

杉

まは

は

孫河文寛

名山曲

俊是多夫

在天下

きちんきん

ふたふた

~~~~~

けいけい

~~~~~

杯必雨

新秋地

相見風涼

~~~~~

輝くちんく

かよあせぬや

さの子ね

あまのこころ

夜すゝ

風流の夜

静しん

高路及の

海ふ

三川と成費

カニカニカニカニ

カニ

夫の子乳

カニ

カニ

三峰岸

雪花は初

白

一夜中

霜美

心を養ふ

福を享く

徳を修む

嘉を修む  
を修む  
あつた

徳を修む

養ふ目高見

飲酒歌

養ふ心を

驚きし

ふらふら

ふらふら

あふらふら

あふらふら

晴く神と羅原

猿一門

さうめん

多き

わがやうに

まじりなうの

えいじ

かふふ

あは

かふふ  
あはあは

若使榮部

並み好勝

有るは心樂

不心

晨明のうら

こころしき

若

心のみま

うひくおね

おね

報類曉興

曲形老

心源をり

心寒

夜過山  
線海  
空海  
酒身  
氣

夜過山  
線海  
空海  
酒身  
氣



あはれ心は  
むらじや  
くろく  
たらののけ  
山子ふし

三山人

娘は

名元

娘は

うらにきふ死

かりとや音

夢秋の月

愛とみとそ

世ひや死れ

向晚簾以

生白露

終夜床底

見青と

夫ふくく

後子  
志之

の

一

か

と東若花時

海情心

唐山雨夜

草菴中

ふらふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

ふらふら

長生殿

長生殿

不老門

前日月邊

よるのよる

こはるのよる

あめし

きり

か

山市晴嵐

一竿酒蹄斜陽意

数篋人家煙曉中

山路醉眠

歸去晚

太平五日

不喜風

あゝ。あゝ。あゝ。

あゝ。あゝ。

あゝ。

あゝ。

あゝ。

遠浦歸帆

鷺島界青山一抹秋

潮平浪浪橋下海

歸橋漸入

暮色花去

長在夕陽

江上頭

西  
む  
の  
こ  
の  
こ  
の  
こ  
の  
こ

浪  
の  
こ  
の  
こ  
の  
こ

清  
き  
世  
如  
神  
の  
ま  
に

の  
ま  
に  
の  
ま  
に  
人

漁村夕照

薄暮  
沙汀  
破晓

稿

江南  
山水  
闹  
鱼  
歌



呼聲買酒

大泉孫

朴老西風

蘇一秋卷

なみのうきをいふは  
此

法一にみくは  
此

まはるきくらのれ

のそ

遠寺晚鐘

雲遮不見梵王宮

殷々鐘聲訖晚風

此去上方

猶遠近

爲言只在

此山中

く 雲 の ぶ 雲 雲

雲

か ぬ の 雲 雲 雲 雲

今

今 ち 雲 雲 雲 雲

雲 雲 落 鷹

古 字 雲 雲 雲

雲 雲

幾 何 秋 雲 雲 雲

善正誤作

御向書

錯向糾陽

刺束綯

あきねあきねあきね

あきねあきねあきね

あきね

あきねあきねあきね

あきねあきねあきね

洞庭秋月

西風剪剪出蒼苔

三首

第頃煇波浴桂苑

海無不知

羈客恨

直吹寒秋

三首

秋

秋風吹落葉  
寒氣透重衣

力學

松  
羅

滿湘夜雨

先自悲以江易斷魂

凍雲粘雨濕蒼昏

孤燈遙意

秋筍意

紙白竹枝

添海痕

石中よ

十部

よあ

あ

秋

江天暮雪

雪後江天暮雪  
玉蕊

高身一

如身

新漢伊

兩聲

新氣山

高興人



あゝの紫よりなれは

おのゝふゝ

遠

ふもはのまは

ゆるり

古人學書者未有不從門入蘓公終為  
非家珍實知蘓公語病如彼鍾繇受章  
仲將羲之學衛夫人者有故子名公墨  
寶者何 本朝諸名公之墨刻也  
本邦自古未見有勤珉刻木之帖是非  
乏其人而好事者鮮矣一日或人以此  
事求我予假借所知家藏極究目力臨  
模鐫刻者若干人若干帖或行草或假

46.000  
名惟急於成帙有不得廣蒐博采之遺憾然墨寶之嗜好淳化之遺意也於是可見龍飛虎跳風雲浮動之姿縱雖無神采望其面目者也若臨池者步其蹊逕知其端倪者庶幾一助云爾

正保二年仲冬月

